

もくじ

私の生理人類学.....	1
生理人類学あれこれ.....	3
研究満喫(学位取得記).....	6
書評「生理人類学一人の理解と日常の課題発見のために」.....	8
第 82 回大会(東都大学)案内(第 2 報).....	9
編集後記.....	10

■私の生理人類学

「功績賞を受賞して」

古賀俊策(神戸芸術工科大学)

このたびは名誉ある功績賞を賜り、大変光栄に存じます。安河内朗学会長ならびにご推薦頂いた会員の皆様にこころより感謝申し上げます。

私は 1980 年代から本学会における活動を始め、とくに 1990 年には秋季大会の大会長を担当させて頂きました。この年は神戸芸術工科大学の開学 2 年目でしたが、年次大会の運営経験がない私および学内職員の方々は、非常に緊張して開催の準備を致しました。幸い、過去の大会長および理事の先生方から色々なアドバイスを受け、無事に大会を終えたことは良い思い出です。また、1994 年～1998 年に隔年で開催された国際生理人類学会議の日本側事務局を担当致しました。とくに、1996 年に奈良で開催された大会において、大会長の登倉尋実先生(奈良女子大学)、および実行委員の方々と大会を運営したことを、懐かしく思

い出します。

研究部会活動としては、井上芳光(大阪国際大学)、近藤徳彦(神戸大学)の先生方とともに適応協関研究部会を運営し、ヒトの自然環境と人工環境への適応能力を考察してきました。この部会の趣旨はヒトが本来有する適応能力の生理学的メカニズムを詳細に解明し、ヒトの適応能力を全身的協関の観点から捉えつつ(恒常性の維持, 多重調節, 相互補完作用など)、生活文化との相互関連を探求することです。

私の研究テーマは「ヒトの作業能力の生理人類学的研究」です。人類が獲得した身体活動能力、とくに他の動物よりも優れた生理機能によって支えられる全身持久的運動能力を研究してきました。具体的には、潜在的な統合生理機能(全身的協関)が顕著に抽出される非定常状態に着目して、各々の生理機能(呼吸、循環、筋、体温など)が統合的に調節される仕組みについて検討を重ねています。

勝浦哲夫前会長が[本学会ホームページ](#)に

述べられているように、「生理人類学はヒトの生物科学的特性を時間軸、空間軸を俯瞰してヒトの本質を研究する学問です。(中略)今日、われわれが生活している環境は、かつてわれわれの祖先が生活していた環境とは著しく異なっています。科学技術の発達は一面では快適な生活環境をもたらしましたが、他方、さまざまな新たな問題を生じさせています。」例えば、新型コロナウイルスがもたらした影響について、評論家の真鍋厚さんは「生物としての人間」の限界を超えていた働き方、無理のあった社会、さらに環境問題、とくに地球温暖化による気候変動に人間は向き合わざるを得なくなったと指摘されています。本学会が、人類が直面しているこのような問題について積極的な発言をすることは非常に重要です。

また、国際化の流れと日本企業の海外シフトが加速し、さらに新型コロナウイルス終息の後には、外国人技能実習制度やインバウンドによって多くの外国人が再び我が国を訪れることが予想されます。このため、世界各国のヒトの特性を科学的に理解することは急務の課題です。人類学が発展した米国と英国に倣い、日本でも人類学、特に生理人類学が大学教育だけではなく、小学校からの学校教育へ積極的に導入されることを期待致します。

今後も、本学会の発展に微力ながら努力したいと思います。今回は本学会の功績賞を賜り本当にありがとうございました。

「功績賞を受賞して」

宮野道雄(大阪市立大学)

この度は栄えある日本生理人類学会功績賞を賜り誠にありがとうございました。多くの学会員の皆様のように、生理人類学分野のいわゆるプロパーの研究者ではない私にとって、身

に余る光栄と思っています。私と生理人類学との関わりについては 2016 年発行の [PANews Vol.26, No.2, 2016](#) に書きましたので、なるべく重複を避けて別の観点から書きたいと思いません。

思い返せば私は色々な分野を渡り歩いてきたように思います。大学の学部は「建設工学科」で私が入学したころは国立大学でも非常に珍しい学科だったように思います。建設工学科は、工学部の建築学科と土木工学科の両方のカリキュラムを合わせもつ新しい分野を目指したものでした。しかも提供科目はすべて選択でしたので、拘束なく自由に学ぶことができました。大学院は別の大学で、指導教員の定年退職の関係で修士は建築、博士は土木でしたので、さらに広い分野に触れることができました。また、大学院での研究テーマは「入力地震動のレベル評価」で地震被災地の現地調査では地理学の先生からの指導も受けましたので、地形や地盤に関する知識も得ることができました。

学位取得後、就職したのが大阪市立大学生活科学部住居学科でしたので、今度は「住居学」という建築に関連しますが別の角度のアプローチを必要とする分野に入ることになりました。生活科学は人を対象とする学問分野であると理解しました。工学の分野にいた時から災害時の人的被害は地震動レベル評価の指標の一つとして取り入れてはいましたが、生活科学分野に移って、今度は研究対象としてヒトをみることになりました。これが「生理人類学」との出会いになります。

私が日本生理人類学会に入会した当時の会長の佐藤方彦先生や副会長の菊池安行先生は上述のような経歴の私を温かく迎え入れてくださいました。お陰で生活科学から少しはみ出だしてさらに新しい生理人類学という分野

に触れることができました。学会の研究の発展に資する功績にあたるような成果は上げられませんが、異分野の人間がいることで幅を広げるという意味では何かしらの存在意義があったのではないかと考えています。

最近の10年ほどは研究の一线から離れてしまい、学会の大会に出席する機会も減りましたが、国内大会で行った日本各地だけでなく国際生理人類学連合による会議の折に訪れたクロアチア、イギリス、アメリカ、オランダ(図1~3)、オーストラリアなどでの経験が鮮明に思い出されます。

最後に日本生理人類学会への道を拓いてくださった綿貫茂喜先生へ感謝するとともに、日本生理人類学会の益々の発展を祈念します。



図1 ICPA2008(オランダ)の会場となったデルフト工科大学のポスター展示場



図2 デルフト工科大学の図書館



図3 宿泊したホテル近くの運河に架かる橋の上で

■生理人類学あれこれ

「社会集団にもチャレンジする生理人類学」

安河内朗(九州大学)

前回の原稿([PANews Vol.30, No.2, 2020](#))では、「環境適応の観点から人の生きる理を探究」するにはこれまでの研究に加えて「文化を包摂する生活環境まで視野に」と書きました。文化は集団の中で形成されるものですが、その集団とはただの群れをなす集団ではなく社会性を成すものであり、そこには「家族や血縁、地域や民族、また国や言語や宗教などで暗黙のうちに括られる階層を織りなすもの」があります。そういったなかで農耕・牧畜文化や食文化を取り上げ、寒さに対する全身的協同反応の多様性、乳糖分解酵素との関係、肌の色と遺伝子型との関係などに触れました。

文化は他にもいろんな側面からとらえる必要があります。社会性という観点からは、人と人のつながり、集団同士のつながり、個人間や集団間のネットワークを考え、その中で築かれる文化との関係性を考えることも重要です。このようなつながりは、まずは縦のつながりの親子関係と横のつながりの姻戚関係からなる家族や血縁関係から始まったでしょう。縦は先祖に遡る時間の流れであり、横は遺伝的系列から

は独立した空間の広がりです。他集団から嫁を迎えることは血縁ネットワークの拡大を可能にします。これに共感や友情といった情動反応を基盤とした機能が協働して互恵性を超えて安定したさまざまな絆を広げることになります。

絆を形成するには共感という機能が重要な役割を果たします。共感するには、まず他者の情動表出を読み取る情動認知が重要ですが、ご存じの P. Ekman らの研究が示すように、人の顔の表情にあらわれる基本的な情動は言語や地域を超えて共通に大別できます。情動表出の普遍性があるから文化を超えて他者の心や意図をある程度読み取れる、いわゆる心の理論を有することになります。人ほどの精度ではないにしても、ペットの犬や猫と主人との双方向の情動反応をおおざっぱに理解できることは経験的に知るところです。

このような共感の機能があることで、コミュニケーションをはじめとする円滑な社会生活や互恵性を促すことができます。また、これらの絆による集団の安定した維持や発展のために種々の社会規範も形成されてきます。生理人類学では、絆の形成を支援するさまざまな生物学的背景(遺伝子型、遺伝子発現、生理反応など)を同定し、文化の形成や機能のメカニズムを探求するとともに、技術革新にともなう文化の変容が人や集団の環境適応に及ぼす影響を検討していく必要があるでしょう。

共感を、「他者の情動表出によって生じる自身の情動反応」と定義すると、先の犬や猫でも触れたようにこれは人が独自に持つ機能ではなく群れをなす多くの動物にも認められることになります。まさに共感とは社会性動物として進化してきた重要な機能といえます。したがって情動を基盤とする共感が社会性や文化との共進化として遺伝子や遺伝子発現とどのように関

わるかも長期的視点をもった近未来環境の予測評価として検討することが必要です。

生理人類学では、すでに社会性に関する研究が始まっているようです。ここ 3 年間の[英文誌](#)、[和文誌](#)をみると8件ほどの論文が発表されています。表情の認知、母の経験の有無による情動反応の違い、母子の愛着、その他情動反応の集団特性などに対して、セロトニン関連遺伝子、オキシトシン、プロラクチンなどのホルモンや事象関連電位やミラーニューロンなどの脳機能の測定から評価を試みています。

昨年の[第81回大会](#)のシンポジウムでも講演された古澤拓郎博士の著書「ホモ・サピエンス 15 万年」では面白い紹介があります。人と人とのつながりが強く相互依存度の高い集団主義と、相互依存というより個人の利益を優先する個人主義に大別し、両集団とうつ病との関係について複数の研究報告を中心に概説しています。それによるとセロトニン・トランスポーターに関連する遺伝子 SLC6A4 において、うつ病リスクの高い S 型は集団主義の傾向が強いアジア地域に多く、個人主義の傾向の強いヨーロッパ地域では少ないが、うつ病関連疾患は逆にヨーロッパ地域の方が多いということでした。また μ オピオイド受容体関連遺伝子の G 型の人には A 型の人より社会的ストレスに過敏に反応するが、この G 型を有する人もアジア地域に多いといえます。一方個人主義の傾向の強い米国におけるハリケーン被災地での調査からは、他者からの手厚い援助があると遺伝子型によるリスクの違いは消失しました。そういえば、東日本大震災のときのキーワードは“絆”でしたね。

さて、以上の事実から、社会的ストレスに対して遺伝的に過敏な人々は、集まって集団主義的傾向を強める気質をそもそも持っている

のではないかと、とすると個人主義社会もそのような遺伝的気質があるのではないかと著者は考察しています。これらにより、遺伝子と社会のあり方としての文化との共進化にも言及しています。

社会的緩衝作用というのがあります。親和的な仲間の存在がストレス応答性を軽減する作用のことで、オキシトシンは母子間の絆や社会的絆に重要な役割を果たしますが、心身のストレスで働く視床下部—下垂体—副腎(HPA)軸の活性化を抑制する働きもあります。一人よりも仲間と一緒にの方が同じストレスへの耐性が高まるのは経験的にもわかります。ストレス過敏な遺伝的気質を持つ人が集まって相互依存型の集団をつくるのは、まさにストレス耐性を高める適応的な行動といえるでしょう。日本の昔はもっと相互依存性がつよく、ご近所がうるさいくらいプライバシーは丸裸に近い状態でしたが、一方で困ったときに助けられたり、子供の世話までやいてくれたりしました。しかしながら、近年、日本の集団主義の程度をあらわす指標がアジア地域の中では低くなる傾向を示しているようです。効率や業績優先の個人主義的評価基準を日本に広く導入した時点で欧米との競争は不利になるのでは、というのは古澤博士の懸念です。

最近のネット社会の非対面のコミュニケーションは人と人のつながり方を変えています。これに拍車をかけたのが新型コロナウイルス感染のパンデミックです。ポストコロナになっても人と人のつながり方を変え続けていくでしょう。集団主義の形成がそもそも遺伝的気質に依拠する人々の集まりという結果であるならば、この人々の集団において絆を薄くしがちなネット社会のあり様、つながり方のあり様はどうあるべきかを考えねばなりません。さらに AI やもののイ

ンターネットが普及し、社会生活のインフラが根本から変わること私たちの絆のさらなる質の変容、それにとまなう新たな文化のあり様がどのように私たちの生活環境への適応能に影響をおよぼすのか、提言していくのが生理人類学の重要な使命のひとつになっていくでしょう。

2021年2月23日、トヨタの実験未来都市「[ウーブン・シティ](#)」の建設が始まりました(朝日新聞 2021.2.24)。これは自動運転、AI などの先端技術やそれによって構成される生活システムを実際に住民が使って暮らし実用化につなげる構想で、2025年までに入居が始まるというものです。おそらくここでは、先端技術やそれを支援するインフラおよびそれに関わる社会システムが安全かつ快適に機能するのかを検証し、実験進行中ででてくる課題に対応していくことに重点がおかれると思います。しかしここでは、革新的都市で形成される新たな人と人の絆や文化の形成、それに伴う遺伝子と文化との共進化の行方までは視野に捉えきれていないでしょう。こういった近未来を想定した社会実験に、本来なら生理人類学者も関わっていく必要があるはずで

以上は主として絆をテーマにして述べてきましたが、もちろんこれだけでは「文化を包摂する生活環境まで視野に」入れることはできません。例えば、民族学、言語学、文学、心理学、社会学、政治学、法学、経済学、宗教学などのいわゆる文系領域においても、およそ人や社会を知ろうとする学問のそれぞれで取り扱われている課題について、生理人類学的にどのように新たな人の理解に結びつけていくかを常に考える必要があります。

近未来の環境がおよぼすヒトや人への影響について、過去から現在までの定性的評価の

単なる延長では予測できないでしょう。光や温熱といった物理的環境要因であれば、近未来の人工環境における行動履歴の変わりようを予測できれば、物理刺激にどのように曝露されるかその特徴を設定することで生物学的適応上の問題をあげることができます。しかし、適応能への影響が文化自体に依存するものであれば、未来科学技術とそれに伴う生活文化の変容を予測しなければ適応性評価の予測はできません。今後の生理人類学は、さまざまな近未来の社会集団にも対応できる研究にチャレンジしていかなければならないでしょう。

■ 研究満喫(学位取得記)

「光工学から生理人類学へ」

江藤太亮(九州大学)

本年 3 月に九州大学大学院統合新領域学府の博士後期課程を修了し、博士(感性学)の学位を取得いたしました(図 4)。日本生理人類学会の会員の皆様には、学術大会や若手の会などを通して数多くのご助言やご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。研究「満喫」ということですので、私が研究生活をどのように「満喫」してきたのかを修士までの研究にも少し触れながら綴らせていただければと思います。

私の博士学位論文の題目は「眼内水晶体の光透過率や瞳孔径の年齢差と光の非視覚および視覚的作用の関係性」でした。眼から入射した光は、色や明るさの知覚などいわゆる見ることに関わる視覚的作用と、概日リズムの光同調やメラトニン分泌の抑制など視覚に関わらない非視覚的作用を生じさせます。これらの光の生理作用の年齢差と、光の入力部である眼の中の水晶体や瞳孔の加齢変化との関係性を調査したのが私の博士研究です。これ

に対して修士はというと、光メモリ(CD や DVD、Blu-ray disc)の更なる大容量化、高転送速度化を目的とした[次世代光メモリ:ホログラフィックメモリの研究](#)を行っていました。博士研究との共通点は光しかありません。修士で扱っていた光はレーザー光でしたので絶対に人に当てるなど教わっていた私が、まさか人に光を当てて実験するようになるとは思っていませんでした(もちろん曝露するのは安全な光です)。

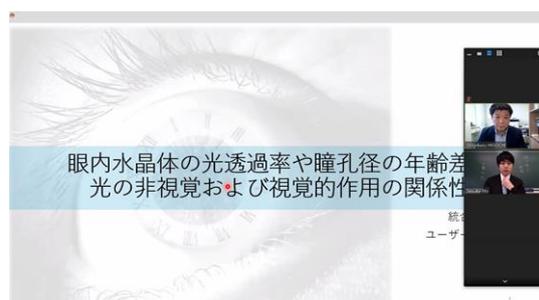


図 4 博士論文公聴会の様子

COVID-19 の影響で残念ながら対面での開催はかありませんでしたが、オンライン開催がゆえに遠方の方を含む多くの方々にご参加いただきました。

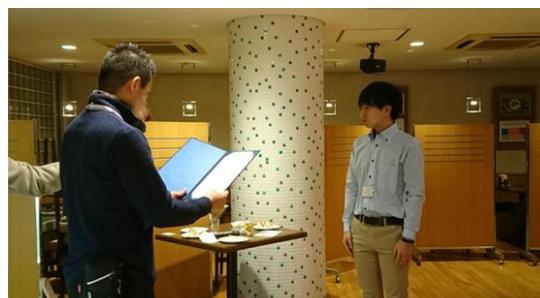


図 5 第 75 回大会優秀発表賞の受賞式

修士研究と同じテーマで一度博士課程に進学しますが、修士課程で燃え尽きた部分もあり、研究領域を環境も含めて変更することを決意します。その後、紆余曲折を経て最終的に樋口重和教授の研究室に快く受け入れていただ

き、光とヒトの関連性についての研究に従事し始めます。とは言え、光は扱ったことがあるもののヒトについてはさっぱりでしたので、いきなり博士課程入学ではなく1年間研究生として学部生と一緒に講義や演習を受講しました。初めは研究生という立場に戸惑いもありましたが、今振り返ると非常に重要で有意義な期間だったと思います。これから飛び込む研究領域に関する勉強や調査をじっくり行うことが出来ましたので。そんな中、何とか発表までこぎつけた[日本生理人類学会第75回大会\(大会長:下村義弘先生\)](#)では優秀発表賞という身に余る賞を賜りまして、新たな分野で研究を行っていく励みになったとともに、身の丈を超えた評価にただただ恐縮するばかりでした(図5)。その恐縮ぶりは[PANews Vol.28, No.1, 2018](#)に掲載いただいた言葉の通りです。

さて、私の博士研究の目的は水晶体の加齢変化(加齢に伴う光透過率の減少)と光の生理作用との関連性を調査することでしたが、この研究テーマを遂行するにあたって私に与えられた最初の課題は、[水晶体の光透過率を生体で測定できる装置](#)の開発でした。修士までに折角学んだ光工学の知識はこれからほとんど使うことはないだろうなとどこかで思っていたので、これまで得た知識をこれからの研究に活かせる課題との出会いに少しワクワクしたのを覚えています。本装置の開発は、Singapore Eye Research InstituteのDr. Raymond P. NajjarとDr. Petteri Teikari、労働安全衛生総合研究所の西村悠貴先生(当時:九州大学博士学生)のご協力なしでは成し得ませんでした。シンガポールや日本でのディスカッションは、英語に大変苦労しましたが貴重な経験となりました(図6、7)。また、開発装置の性能を検証するための実験においては松阪中央総合病

院の久瀬真奈美先生にもご協力いただきました。改めて多くの先生方のご協力の上に成り立った研究であったと思わされます。皆様にはこの場を借りて感謝申し上げます。



図6 Singapore Eye Research Instituteにて
一番左:著者、左から二番目:樋口重和先生、
左から四番目:Dr. Petteri Teikari、中央:Dr.
Raymond P. Najjar。



図7 九州大学大橋キャンパスにて
左から、樋口重和先生、Dr. Raymond P.
Najjar、Dr. Petteri Teikari、著者、そして西村
悠貴先生。

博士課程の約1年を費やし苦勞の末ようやく完成した装置を用いて実施した、水晶体や瞳孔の年齢差が子どもと大人のメラトニン抑制率の違いに与える影響についての調査結果は、[日本生理人類学会第81回大会\(大会長:田井村明博先生\)](#)で優秀発表賞を賜りました。身に余る評価にまたもやただただ恐縮しておりますが、これまでの研究生活が間違っていなかったことが証明されたような気がして大変嬉

しく思っています。こうして振り返ってみると、要所所で日本生理人類学会ならびに学会員の皆様には激励をいただいていたなとつくづく実感いたします。

長々とこれまでの研究経歴を綴ってまいりましたが、ここには書ききれないほど毎日が刺激的で大変充実した研究生活を「満喫」できたと思います。これもひとえに、ご指導いただいた先生方はもちろんのこと、先輩や後輩、同期の皆様のおかげです。特に、九州大学 樋口重和教授には研究生1年間と博士後期課程3年間の計4年間、ひとかたならぬご指導を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。まだまだ未熟ではございますが、これからも当該研究分野の発展ならびに生理人類学への貢献を目指して研究を「満喫」していく所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

■書評「生理人類学—人の理解と日常の課題発見のために—:安河内朗・岩永光— 編著(理工図書)」

「私が見た生理人類学の真骨頂」

西村貴孝(九州大学)

本書(図8)は、生理人類学を最前線で研究する気鋭の若手研究者から熟達のベテラン研究者までが、それぞれの専門領域の概要と最新の知見をまとめ、その中で現代あるいは未来の人類の課題を提示することを試みたものです。生理人類学は今を生きる我々自身の人類学を標榜しており、適応・進化の観点からヒトがどのような生理機能を有するに至ったのか、そしてその生理機能が現代社会においてどのような課題に直面しているのかが、網羅的かつ詳細に記されています。本書は初めて生理人類学に接する者にとっては読み易く、かつ生

理人類学をよく知る研究者にとっても非常に有益な情報が含まれており、編者・著者の先生方の気合が伝わってきます。

本書は5章から構成されており、「第1章 生理人類学を学ぶにあたって」では、生理人類学のコンセプトから、遺伝・進化の観点、集団の適応と個体の適応の違いについてまとめられています。まずはじっくりと第1章を読むことで、生理人類学における適応の意味や、適応のメカニズムおよびその多様性の全体像を掴むことができるでしょう。「第2章 ヒトの物理的環境への適応の特徴と課題」では、ヒトが物理環境にどのように適応してきたのか、そして急速な近代化がもたらす適応能への影響と課題について、時間軸と空間軸から議論が展開されています。「第3章 人の日常行動と課題」では、生理人類学の視点から見た、人の身近な日常生活全般の知見がまとめられ、その中で高齢化問題を含む時代と共に変化する課題が見て取れます。「第4章 人の快適性と課題」では、人の情動やストレスのメカニズムから始まり、様々な課題に対するデザインの果たすべき役割について広く議論が展開され、生理人類学の懐の深さを思い知ります。そして最後に「第5章 人の未来と課題」では、人間社会と人間の本質を俯瞰し、絶え間なく出てくる新しい課題に対して、生理人類学が果たすべき使命は何か、そして我々が何をすべきかを問いかける形で締めくくられています。読者は是非、日常生活において日々直面する小さな課題から、気候変動や社会変容がもたらす大きな課題まで、自分であればどう対処するのか?と考えながら読んで頂きたいと思います。本書の問いかけへの答えは、その日々の思索の中から生まれてくるのかもしれませんが。

さて、本書が編集されている真ただ中で、

人類はまた大きな課題にぶつかりました。新型コロナウイルスの世界的大流行です。その影響は、感染による世界的な死者数の増加のみならず、我々の生活を一変させるに至りました。すなわち、緊急事態宣言に伴う外出自粛やテレワークの推進等、です。2020年度の大学1年生に至っては、全面的な遠隔講義により同級生とほぼ顔を合わせないまま1年間を終えてしまいました。今後、運動不足やコミュニケーション不足による諸問題が、徐々に顕在化していくと思われます。これらの新しい課題に対して、我々がどのように適応していくのか、本書にはそのヒントがたくさん散りばめられています。読者が本書を読み解くことが、コロナ禍を、そしてその後の未来を健康に生き抜く糧になることを願ってやみません。

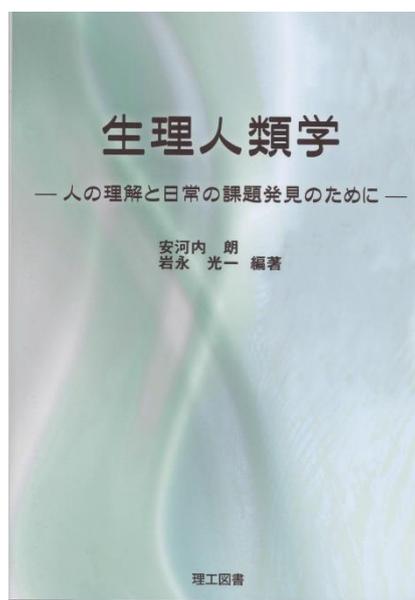


図8 「生理人類学—人の理解と日常の課題発見のために—」(理工図書)の表紙

■第82回大会(東都大学)案内(第2報)

大会長 佐藤香苗(東都大学)

新型コロナウイルス感染症の終息の見通しが立たない状況が続いておりますが、皆様い

かがお過ごしでしょうか。第82回大会は、来る10月29日(金)～31日(日)に実行委員の皆様のご協力によりオンライン開催いたします。「新しい栄養学研究への挑戦:基礎と実践科学の環(わ)」をメインテーマに、北海道大学の山内太郎教授がオーガナイザーを務める特別講演(総合地球環境学研究所 山極壽一所長)および教育講演(東京大学総合研究博物館 米田穰教授)、ならびにエネルギー代謝に関するシンポジウムと樋口企画戦略担当理事によるシンポジウム、フロンティアミーティング、和文誌編集委員会企画、そして、ポスターセッション等を予定しています。

大会案内第1報([PANews Vol.30, No.3, 2020](#))では教育講演の概要をご紹介させていただきました。会員の皆様からすぐに期待の声を頂き、反響の大きさに驚いております。今回は「エネルギー代謝の多様性と適応能(座長:九州大学 前田享史教授)についてお知らせします。

シンポジストは、女子栄養大学 田中茂穂教授、大阪大学 中江悟司先生、東都大学 佐藤香苗、九州大学 前田享史教授の4名です。皆様よくご承知のとおり、エネルギー代謝は健康や適応能に密接に関連している生理機能です。性別、年齢、体型、遺伝などの個体特性や、食事、運動、環境などの生活習慣・環境要因など、様々な要因により影響を受けることが知られています。多様性の大きいエネルギー代謝に着目しその理解を深めることは、現代を生きる人類のさらなる理解につながると考えます。本シンポジウムではエネルギー代謝の基礎、小児や認知症高齢者の安静時代謝と摂取エネルギー必要量の推定、基礎代謝量と耐寒反応などの話題を提供し、エネルギー代謝の多様性と健康・適応能について議論す

る機会としたいと思います。座長の前田享史教授より「活発な議論をとおして生理人類学の深化に貢献できれば幸いである」との力強いお言葉を頂戴しています。

シンポジストの一人である田中茂穂教授は、国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所でエネルギー代謝に関する研究に尽力されてきた先生です。対象者の摂取エネルギー量推定の際、理論と現実の格差を思い知らされ、私自身、教育研究を進める上で多くの悩みを抱えております。今回、田中教授から基礎代謝量を測定している写真(図 9)と一緒に熱い思いが届きました:「基礎代謝量は、日本でも約 100 年前から数多くの測定が実施され、変動要因についても、ある程度の知見が得られています。しかし、一般市民にも言葉が浸透してきた一方で、その定義は時に誤解され、根拠に基づかない情報がひとり歩きしています。また、本来、基礎代謝量の正確な把握が望まれる有疾患者や高齢者、子供などについては、まだまだわかっていません。さらに、十数年前に、ヒトの成人でも褐色脂肪組織の活性がある

ことがわかり、寒冷刺激が安静時の代謝量に及ぼす影響についての報告も多数みられます。安静時代謝量やその特殊な条件下の値である基礎代謝量について、どこまでわかっていて何がわかっていないのか整理する機会となればいいですね。」

近く、申込日程・方法について、ご案内いたします。会員の皆様は勿論、会員外の方々もお誘い合わせの上、是非多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。



図 9 基礎代謝量測定の様子
(提供:女子栄養大学 田中茂穂教授)

■学会動静

日本生理人類学会第 82 回大会

会期:2021 年 10 月 29 日(金)~31 日(日)

運営本部:学校法人青淵学園深谷キャンパス 2 号館

大会長:佐藤香苗(東都大学)

編集後記

今号もまた、生理人類学会の奥深さを思い知る一号となりました。多くの投稿をいただき有難うございました。PANews は論文誌とは違い、様々な立場の研究者の苦労や喜び、熱い意見を、ときに清々しく、ときに生々しく、読むことができます。次号もまた、会員のみなさまからの〇〇しい投稿をお待ちしております。(下村)

次号予定

技術紹介、研究部会レポートなど

2021年7月末原稿締切

PANews 編集事務局

下村義弘(千葉大学大学院工学研究院)

shimomura [at] faculty.chiba-u.jp